



小田高 1146 通信

2008年4月1日発行
第1号

In the center of your heart and my heart, There is a wireless station; So long as it receives messages of beauty, Hope, cheer, courage and power From men and from the Infinite, So long are you young.

小田高 1146 通信」創刊

皆様如何お過ごしでしょうか。寒く長かった冬も終わり、桜の花の咲く今日この頃、多くの方が我が友は今どうしているのだろうと、時折考えているのではないのでしょうか。最近はメールを使って情報をやりとりすることが増えました。メールは手軽で気楽に使うことができます。けれどもメールでは中々細かなことは書きませんし、普段やりとりする範囲は限られています。そこで原稿をメールで集め、それを編集して電子版でも見ることができ、印刷してもきれいなニュース形式の会報を作ろうではないかということになりました。

1月に原稿を募集したところ、皆様から大変貴重な原稿や写真をお寄せいただき、ここに第一号を発刊する運びとなりました。皆様のご協力に深く感謝します。

タイトルの下に掲げた英文は Samuel Ullman の詩「青春」の一節です。この会報を通して皆がエネルギーを新たにできるよう願っています。春秋二回の発刊を考えていますので、今回原稿を寄せられなかった方は是非次回にご寄稿ください。

平穏な生活に感謝

4組 太田 充 turuturu@os.rim.or.jp

63歳で職を辞した後、取り組んだことは、これまで育ててもらった核融合社会への恩返しです。2年ほど掛けて「飛躍の軌跡・核融合」を出版しました。新しい技術を生み出した研究者、技術者に直接話を聞き、新技術を生み出した経緯を綴ったものです。新技術の源は、失敗経験であり、情熱や若さであり、また多分に幸運も加味されたものでした。これからの若い研究者、技術者に是非読んで貰いたいと思います。

現在は、日本古代史の執筆に取り組んでいます。20年ほど前に、皇国史観に疑問を感じ、出雲、吉備、畿内等を何度か散策しました。今では北九州王朝説に傾いています。

日常生活は、週2回のテニス、週1回の囲碁例会、ゴルフ教室、ハンゲル教室を楽しんでいます。ハンゲルは、古代史に役立てばと始めましたが、2年前にハンゲル能力検定試験5級に、1年前に4級に、この度3級に合格しました。受験した東京会場では3級受験者は800名ほどでしたが、ほとんどが若い方でした。全国での3級の合格率は26%とのこと。

現在、このような平穏な生活を送れる自

分がありがたく、周囲の皆さまに感謝しています。



編集者コメント

この本は ERC 出版から出されています。

写真は編集者所有の物をデジタルカメラで撮りました。

編集:

今道 周雄
江口恵一郎
米山 勉
吉田 明夫
石塚 敬一
月村 博

目次

- ・ 平穏な生活に感謝 太田 充
- ・ ボランティア活動でエチオピアに行ってきました 林 明德
- ・ 箱根旧東海道を歩く 石塚 敬一
- ・ いつも二人で・・・プラス・ワーン 榮 憲道
- ・ 小田高クラス会報発刊に寄せて 瀬戸 章嗣
- ・ 近況報告 篠窪 弘行
- ・ 文化の違い 掬川 正人
- ・ 友を悼む 遠藤利夫
- ・ 与那国島でダイビング 米山 勉
- ・ 近況 小澤 敦男
- ・ 高知在住40年 大野 正夫
- ・ 親子で楽しむモータースポーツ 吉田 明夫

ボランティア活動でエチオピアに行ってきました

6組 林 明德 akinorihayashi2005@yahoo.co.jp

1. 行くまでの経緯

定年退職後、両親を看取り、葬儀、3回忌までの法事が終わると、いつしか4年ほどの歳月が経っていました。時間がタツプりあり、まだ元気だし人生最後のチャレンジと思いJICA(独立行政法人国際協力機構)シニアボランティアに応募しました。

エチオピアでの建設業の経営指導がその任務でした。実務経験の年数だけは十二分に満たしてはいるものの(準大手ゼネコンに31年余勤務)、特別のスペシャリストでもない自分に出来るかどうか自信もありま

んと飢餓の国」くらいの認識しかないと思います。長い歴史と文化を持つ神秘的な国で、一時社会主義だった事もあります。1991年に17年間続いた社会主義から離脱して民主共和国となりましたが、いまだ土地の国有等社会主義の色彩を残しています。技術も遅れ国内の主な輸出品はコーヒーくらいで、国は貧しく、外国からの援助で成り立っています。日本の援助もインフラ整備の為に道路建設、安全な水の確保、教育、農業改善、森林保護等多方面にわたっています。

私の活動拠点は前半がMinistry of Capacity Building(人材開発省)、後半はエチオピア建設業協会でした。そこでのアレンジに基づき、中堅から大手までの建設会社10社を順番に巡回して、会社の



小泉首相とエチオピア在留邦人との懇談会

首相の左隣が私、右隣は仲間のシニアボランティア、私の隣の女性は国連機関の幹部

せんでした。しかしその判定はJICAに委ねる事として割り切りました。まさかの合格通知が来てから本当に行くのか辞退するのか悩みました。自分の海外経験は3年半の中国北京だけ、帯同する妻は旅行以外に海外生活経験はありませんでしたが、面白そうだと一緒に行ってくれました。そして2005年10月から2年間のエチオピアの首都アジスアババでの生活が始まりました。

2. エチオピアでのボランティア活動

エチオピアといっても、多くの日本人には「マラソ

案内書、決算書類、組織図を検討し、施工現場を視察して指導をしました。

それぞれの仕事が有機的に結びついていず無駄が多いのが問題で、従業員を効率的に働かせる人事管理のシステムが機能していないという感じを持ちました。このような事は理論だけでなく外国資本との合弁事業とかの実践を通じて習得すべきものでしょう。大規模な国際入札の工事が外国勢に独占されているのも、国内業者の技術のレベルが低く企業規模も小さく組織運営も近代的になされていない事から、まだ暫くは止むを得ないと思われます。

3. エチオピアでの生活

在留邦人はおよそ160人、その内JICA関係者一所属員、専門家、ボランティア、無償援助関係一が60%以上、あとは大使館、国連機関、NGOとかで。大部分は首都のアジスアベバに住んでいます。標高2,400mの高地にあり、慣れるまで息が切れる事がありますが、1年は乾季と雨季に分かれ、乾季は夏の軽井沢とも言える快適な気候で住みやすい所です。帯同した妻は青年協力隊員と一緒に大使館に置かれている日本人補習校で、毎週土曜日に小中学生の先生をしました。



青ナイルの滝

琵琶湖の5倍のタナ湖から流れている。スーダンの首都ハルツームで白ナイルと合流し地中海へ。

エチオピア人は宗教心が篤くキリスト教（エチオピア正教）とイスラム教が半々ですが仲良く共存しているようです。他のアフリカ人とは少し違い中近東からの血の影響か美男、美女が多く、青年協力隊員の中には現地女性を連れて帰り結婚する者が珍しく



大地溝帯

アフリカ大陸を引き裂く地球の割れ目、数千年後には新しい海が誕生



ラリベラの岩窟教会群

世界文化遺産で12世紀に岩をくりぬいて作られた

はありません。性格も温厚な人が多く、おじぎをしたり伝統音楽が日本の演歌に似ていたり、日本との共通点が多いのに驚かされます。

現地の日本人社会は人数も少ない為か皆仲がよく、運動会やらテニス大会、補習校の遠足等に参加し、現地駐在では最高齢者でもあり皆に大事にされ、快適に生活できました。任期中の2006年5月には、小泉首相がエチオピアを訪問し、在留邦人の代表11人の一人として懇談会に出席し、歓迎夕食会でボランティア仲間と共にパレスに招かれたり、日本ではありえない貴重な経験もしました。

4. シニアボランティアの勧め

JICAボランティアはいわゆる有償ボランティアで、現地の住宅、生活費は支給されましたので、それで十分生活はでき、持ち出しはありませんでした。支給された現地生活費でたまにはエチオピア国内旅行も、国内に一つしかない9ホールだけのゴルフ場にも行けます。青年協力隊の連中と一緒に行動する事が多かったのですが、自分の子供世代と一緒に活動したことで若返り、生活習慣病が改善するといったおまけまでありました。冗談半分に「孫の話と病気の話ばかりの仲間」の中に戻ると言って帰国しました。

シニアボランティアの制度は69歳までが有資格者で、春秋年2回JICAの募集があります。1990年に発足し募集人員も次第に増え、700人余のシニアボランティアが世界50数カ国で活動中です。低開発国に行く為、健康である事が絶対必要条件ですが、蓄積した技術を世界の人々のために生かす事はやりがいがあります。是非皆さんにも応募をお勧めします。

箱根旧東海道を歩く

6組 石塚 敬一 kei-isi@k00.itscom.net

小田高の何年生の時だったか記憶が定かでないのですが、学年全員で元箱根から旧東海道を湯本まで歩いたことがあります。

それがどこをどう歩いたのか、はるか右下に江戸時代の風景かのごとくに人家と谷間が見えたこと、先を争って足が棒のようになったこと、だけが記憶にある以外何も思い出せません。

あれから四十数年たち、一昨年（平成18年）秋、生憎の雨となってしまいました。中学のクラス会で元箱根から畑宿まで（元気のいい友人と私の二人は湯本まで）歩く機会に恵まれました。引率してもらったのは石畳や甘酒茶屋など記憶にない道で、今から思うと高校の時に歩いた道は今ではバスや車が走る自動車道だったのかと思われました。そして右下に見えたのは須雲川です。

更に一年経ち、昨年（平成19年）11月下旬、紅葉の箱根旧街道を再度歩くことになりました。大学の同窓生で毎月東京近郊を中心に散歩会をしています。私の地元の箱根を案内しろとの要望があり、新装なった関所跡を出発して杉並木、石畳、甘酒茶屋と江戸の往時を偲びながら畑宿までのウォーキングを楽しみました。

良い天候でしたが石畳では足の置き場に注意しながらの歩きで、「昔の人の箱根越えは本当に大変だったことがよく分かった」というのが皆さんの想いでした。

平成 19年 11月 22日

大学同窓生と甘酒茶屋の紅葉をバックに
(石塚は向かって右から2人目)

箱根旧街道は私の記憶の中ではるかかなたに霞かけていましたが、この2回の再訪で高校時代のことと共に身近に蘇ってきました。仲間に行こうといわれればまた行きますが、自分一人ではなかなかその気になれないほど大変なのが箱根旧街道です。今度訪れるのは何時のことになるのでしょうか。その時に歩ける元気を維持していきたいと思います。

いつも二人で・・・ プラス・ワ～ン

6組 榮 憲道 sarara@hm.aitai.ne.jp

私たちの世代で最も好かれた外国の映画女優といえば、間違いなくオードリィ・ヘップバーンであろう。『ローマの休日』『麗しのサブリナ』『ティファニーで朝食を』『マイフェアレディ』等、ヒット作品は枚挙に暇がない。

そんな中で、あまり知られていないが、カルト的とか特殊過ぎとか評された不思議な感覚の映画がある。それが『いつも二人で』——1967年、彼女が三十七歳のときの作品である。

【この世はすべて流れゆく。永久不変ということはない。慣れ親しんだものも色あせるときがいつかはくる。】

『方丈記』の冒頭のようなせりふも流れるが、これという事件とか感動的なクライマックスもない、ある夫婦のどこにでもありそうな人生模様。その二人の出会い、恋愛、結婚、トラブル、不倫、愛憎、そして再出発・・・12年間の軌跡を、南フランスでの車の旅だけに絞り込み、順序をばらばらにして見せる。



私が結婚する一、二年前に観た映画であり、当時は夫婦の機微がよくはわからなかったけれど、妙に印象に残る作品として記憶のなかにある・・・。

まもなく結婚四十年を迎える私たちにもいくつかの節目があった。

東京・赤坂での運命的な出会い、わずか9ヶ月後の結婚、二人の子供の誕生、東京・大阪・名古屋・大阪と辿った転勤と転居生活、10年余に亘る単身赴任、退職してまもなく罹った胃がん・大腸がん、子供たちの結婚、待望の初孫の誕生——その間、映画の二人と同じようにそれなりの軋轢、トラブル、衝突、愛憎があり、そんななかで現在の夫婦の形を築き上げてきた。

毎晩十時、名古屋の地で再び二人だけに戻った私たちは、お転婆犬サラと連れ立って散策する。静まりかえった住宅街から、閉店間際の割烹店、ダーツで興ずる若者が群れる遊戯店、カラオケの洩れるスナックと続く一角を抜け、なお華やかなグリーンロード（名古屋の中心街にまっすぐに通ずる幹線道路）に出て、再び住宅街に戻り帰宅する。

「星がきれいだね」「今日は盛況だな」「もう少し上手く歌えんものかな」

他愛のない会話を重ねながら近所を一回りする20分程度の短い時間だが、『いつも二人で』の感覚が不思議に甦るときである。

「こうして一緒に歩けるのはあと何年だろうか」

「そうね、せめてあと10年、サラを看取ってからにしましょう」

そう、《いつも二人と一匹で》。人生の最終章を見据えて、今晚も凍てつく道に足音を響かせる私たちである。

（2008年2月 記）

小田高クラス会報 発刊に寄せて

6組 瀬戸 章嗣 setoa@q06.itscom.net

<人生150年は実現する可能性が十分ある>と、年初の日経コラムで読みました。2050年には人間の寿命が150歳まで延びるという専門家が米国に現れたとのこと。2050年に我々が生きていれば、まだ余命40年を残す110歳の若者ということになります。これは、若い時から<才子短命、我100年>と言い、還暦の頃からは<2回目の還暦>を高く掲げている私としても戸惑うことです。

小田高卒業以来49年、半世紀が経つと思うと感無量ですが、これから先の方が長いかもしれないとなると、次の50年をどう生きるかということになり、小田高時代に向き合っていた問題に、今又向き合っているとさえいえます。50年前には、それに猛勉強で対応したと思います。

寿命まで楽しく生活できないかと思うとき、私は今、<アンチエイジング>と<猛勉強>で次の50年を目指そうと思っています。

猛勉強となれば小田高時代がモデルです。1日7時間の睡眠は確保した上で、あとは勉強優先の時間割を作り、愚直に遣り通した小田高時代を懐かしく思い出しています。

小田高時代の猛勉強には人生を楽しむ基礎の秘密があったらしいのを最近知ったような気がします。最近、脳科学者の茂木健一郎さんの「脳を活かす勉強法」(PHP)を読んでいてそれを感じました。田舎から出て、入学時の成績は多分中のグループでも、勉強は嫌いではなく、達成感を感じつつ、面白いとさえ感じる勉強をしたように思います。

勉強が面白くてたまらないように、勉強を工夫してやってみようと思っています。

脳に「ドーパミン」が出る、強化学習によって脳を強化する。

「タイムプレッシャー」によって、脳の持続力を鍛える。

「集中力を」徹底的に身につける

これが、脳が喜ぶ三つのしくみだそうです。

あとは実行あるのみです。さて、どうなりますか。還暦後7年間、気に入ってやってきたマンション管理人の70歳定年のあとを考え、マンション関係の仕事で生きがいと社会貢献を続けたいと思っていますので、ここ1、2年は資格試験の受験勉強に集中しようと思っています。OB会関係の交流は、会合には失礼することが多いですが、メールでの交流には気楽に参加させてもらうつもりです。会報では読み手に回ることが多いかも知れませんがあしからず。

2008年2月12日

setoa@gakushikai.jp

<寄稿文を書く前のメモ書き>に続く

(寄稿文を書く前のメモ書き)

今年の私の初心は今更ながらですが<時間管理>です。それと集中法、国見先生のびっしりのガリ版刷りの暗記メモがあったからだと深く感謝しています。先生やクラスの仲間との交流、直向きな学習時代

「君達、一日2時間の勉強をきちんと続けられたら大学教授になれるよ」

・川辺先生のことばで、先生は後に大学教授になられてこれを実証された。

「君達、硬い鋳物のような頭はだめだ。反り返り元に戻る鋼のような頭を鍛えろ」

・中庭で教頭先生から聞いたと思うが、ずっと心してきた。

いくつかの言葉や事柄が浮かび上がってきました。

中学の時は英語で恩師の指導に従い、<JACK AND BETTY>の1と2を少しずつ全文暗記して、全部暗誦できるようになり、高校の時は、分厚い「幾何辞典」の全問を何度も解いて、全問解けるようになっていました。私の高校入学の頃は、授業などで周りの友人の頭の良さに驚くことがよくありました。成績も決してそれほど良くありませんでしたが、卒業前の模擬試験で3位になったことがあり、これも達成感を感じました。

卒業後大学で選んだ外国語が中国語でしたが、20人ほどのクラスに全学連の幹部や共産主義者等がいて、喧々譁々の議論と出会い、その双方に理解を示しながら中国語と物の見方を教える先生に出会い、クラスでは日和見主義者、田舎に帰ると危険分子の様な立場でも、一生懸命考える時間を過ごし、安保反対運動のデモには毎回参加して、樺美智子さんが亡くなった国会南通用門では、樺さんの10メートル程後にいました。

近況報告

4組 篠窪 弘行 whitesnow40@y7.dion.ne.jp

私が名古屋に住むきっかけと成ったのは大学の研究室の教授がたまたま日本碍子(株)の顧問をされており、その会社で一人採用したいという事を聞いた事でした。同社を定年退職後、中部大学の非常勤講師を6年間勤め、去年から無職の年金暮らしとなりました。現在小田原に実家は無く、墓参り、法事等で年に数回帰る程度です。

私の趣味は硬式テニス、登山、バードウォッチング、男声合唱、カメラ、美術鑑賞等であり、毎日結構忙しく暮らしています。今回はそれらの内から主なものを紹介します。

・硬式テニス：

テニス歴は20年以上 可児市の平和テニスクラブで3回/週、犬山市テニスコートで1回/週程度、3-4時間/回程度楽しくやっています。

・登山：

所属山岳会は「愛知県勤労者山の会マップ」、登山歴は15年程度です。百名山登山は一昨年、7年をかけて終了し、一段落しました。最後の山は笠ヶ岳-黒部五郎岳縦走であり、毎日11-13時間歩く強行軍で大変でした。又、夫婦で山旅も楽しんでおり、海外トレッキングはスイスとニュージーランド・南島に各2回、ハワイ・カウアイ島と中国に各1回行き、今年3月はキナバル山(ボルネオ、4095m)に登る予定です。

・男声合唱：

年を取ってからも出来る屋内の趣味として、去年から始めました。名古屋の「メンネルコーア東海」に所属し、毎週金曜日の夜3時間程練習しております。パートはバリトンです。団員は60名程度、年齢層は50-90代とかなり広く、私はその中では若い方です。

おきて、電車に乗って出勤し、仕事をして夜に帰宅する生活を終わり、その後開発途上国の人達に建設工事の災害防止につき話しをする機会が毎年数回ある。中国をはじめ東南アジア、中東、中央アジアの国々の人達であり、熱心に日本の建設業について学んで帰っていく。

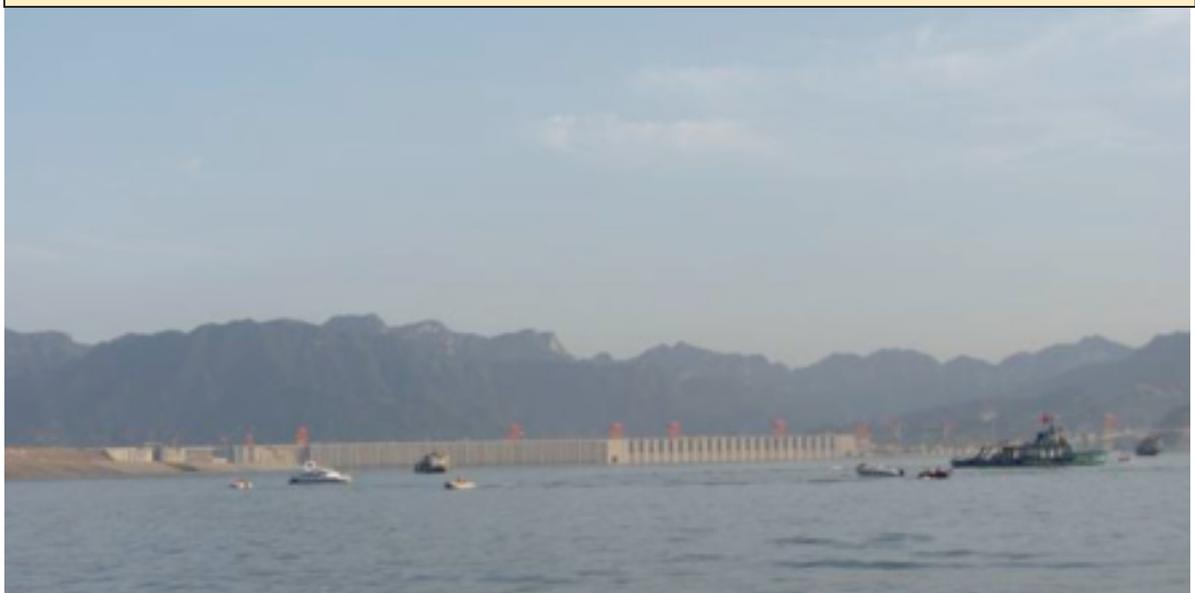
ある国に現地指導に行った折、事故が発生しその原因につき討論をしたが、彼らは一応に自己の正当性を主張し、自分が指示したことを部下が実行しな

いことに原因があるとの発言に終始していた。自分の指示したことを部下が実行しているかを確認する考えはないように思われた。個人主義が徹底しており、自分の非を認めると身分が怪しくなってしまうようでもある。

お国柄の違い、宗教の違い等々を念頭において話すようにしているところです。餃子問題もこの延長線上にあると思われる。



中国三峡ダム遠景



友を悼む

2組 遠藤利夫

去る2月17日の夜半、奥様からの電話で広石辰男君の訃報を知りました。思えばあの40年程前の新宿駅での出会いがなかったら、私にとって彼の存在は、多くの小田高同窓生と同様、単なる友達の一人にしか過ぎなかったと思う。

当時の私は、大学卒業後2年余り東京日本橋にある小さな繊維会社の営業として勤務、椎名町（西武池袋線）の食事付の下宿に住んでいました。殆んど毎晩のように取引先との接待続きで、帰りが遅く律義な下宿の女将さんが用意してくれた夕飯は、毎日手付かず残してしまい心苦しく感じていました。

そんなある日の夕方、乗り換えのため新宿駅のホームを歩いているとき、後ろから私を呼び止めたのが、高校卒業以来6年振りに出会った広石君でした。その日は、そのまま戸越銀座駅（東急池上線）から徒歩5分程にある彼の下宿に投宿。夜を徹して飲み明かし高校以来のよもやま話に花を咲かせ、旧交を温めたものでした。

その時の彼は、東京水産大学（現東京海洋大学）3年の学生でした。そんな話の中で、私が今の下宿を引き払い新宿方面に下宿替えを考えていることを話すと、彼が自分はこれからの2年間は航海実習に出ることが多くなり、下宿を明けるから、出来れば留守番を兼ねて一緒に同居しないかと持ちかけられ、社会人となっていた私が彼の下宿に転がり込んで、居候する破目になった訳でした。

彼の下宿は、木造2階建の長屋風のアパートで彼の部屋は、廊下を真っ直ぐ入った一番奥の6畳間。部屋の真中に豪華な木目のステレオ装置が置かれ、テレビ（白黒）を始め当時の3種の神器が揃い、その他洋服ダンスや、家具調度類もずらりと揃い、当時の学生としては、リッチな生活振りを思わせる部屋でした。

彼は、実習のため月のうち2週間ほど下宿を明け、残りの2、3週間が彼と起居を共にする生活でした。朝飯は抜きでしたが、夕飯は必ず彼がガスコンロに釜を載せてお米を炊き、おかずに玉子焼きとか、野菜炒めなんかを作ってくれて、一緒に食べたものです。それに納豆もよく食べました。そうそう味噌汁は必ず作ってくれました。なんの術った様子もなく淡々と調理していた様子は、今にして思うと、後に彼が料理人の世界へと進むことになる兆し、片鱗がその振舞いの中に潜んでいたことを、思い起こさせるものでした。

その後まさか、彼が本当に料理人を目指して修行するようになるうとは、当時の私は夢にも思っていませんでしたから、せいぜい「広石君はまめで、本当に器用な奴だな〜」くらいにしか、考えていませんでした。

夕飯の後は、彼が先生になって囲碁を数局打った後、必ず戸越銀座商店街を2軒ほど飲み歩いたものです。行き付けの店はニッカバーで、彼は「髭のブラックニッカ」を好んでボトルキープしていました。

今思い起こすと、友達であるとは言え、彼の好意に甘えてほとんど荷物らしい荷物も持たず彼のアパートに転がり込み、居候を決めた当時の自分を思うと、実に厚かましく今でも恥ずかしい気持ちで一杯です。同居していた間、1度たりとも嫌な顔を見せませんでした。2年余り一緒に生活できたのもリッチな心が自然に滲み、白洲次郎ばりのダンディズムが身についた、紳士だったからではないだろうかと、今でも思っています。

4年生になり卒業論文の準備期になると、実習も長くなり3ヶ月程帰らない日々が度々でした。当時は蒲鉾の原料となる白身魚は主に「グチ」が使われていたようでしたが、その漁獲量が減少したため、まだ全く使われず当時は無尽蔵と言われた「スケトウダラ」を、漁獲してすり身加工する技術開発が始まったばかりの時期でした。彼の卒論テーマも「スケトウダラ」のすり身加工だったようで、乗った実習船の行き先は北海道方面だったように聞いていました。

そんな生活が続いた彼の大学4年の夏休みは、小田原に帰省。下宿に帰ったのが9月の始めでした。その時の彼の決意を今でもはっきり覚えています。「自分は、悔いのない人生を真っ直ぐ生きたいから、高校卒業の資格で、富士屋ホテルに就職してコックを目指すことに決めた。先日小田原市立病院近くに住んで居られる総料理長（小島源太郎さん）に会って来た、コックは中学卒までが条件だが、例外的に高校卒までは受け入れてもらえると言われた。もう、後戻りはしない。いつの日か自分の理想とする洋食店を持ちたい。」

私は青天のへきれきで吃驚してしまいましたが、確かその時は、社会人の先輩顔をして常識論を言い、止めた方がいいようなことを言ったように思う。2浪までして入った難関の国立大学の学歴を捨てて、何も好き好んでやることもなかろう、大体もったい無さ過ぎる。考え直した方がいいよ、などなど。ごく常識的な意見を言ったように思う。当時は経済が高度成長期にあったこともあり理系大学出身者の就職は、大手水産会社等から引く手あまたの時代だっ

たことを考えると、ただただ驚くばかりでした。翌年3月の卒業まで、その後も彼の意思はいささかも変わらず、卒業と同時に料理人に向け富士屋ホテルに就職することになりました。

彼がアパートを出た後、私はその部屋を引き続き借りることにして、1年半余り一人暮らしを続けました。丁度その頃の私は、就職して3年半余りとなり、自分の仕事に疑問を感じるようになっていた時期で、彼の自分のやりたい事を見つけ妥協しない姿勢に一種の感銘のようなものを覚えていました。自分も今一度自分が入りたかった会社に再チャレンジして見ようと思うようになり、転職（ホンダレンタカー）を決意する切っ掛けになったことを思い出します。

15年程の月日が流れ、料理人として富士屋ホテル調理場の主任になったと聞いていたところ、その後間もない頃、市内中町マンションの2階でレストランを開業することになった旨、案内状を頂き彼の独立を知りました。

彼の目標に向かって妥協しない職人魂とでも言おうか、仕事に対する姿勢や矜持、その生き様には全くぶれがなく、今でも頭が下がる思いがしています。広石君ありがとう。君が作った本物の料理を堪能させて貰えて、本当にありがとう。

先日奥さんから聞いたところでは、君は病気を知り入院するにあたり、道具類は、いつでも使える状態で仕舞い、料理人の命であるソース類等も封印して冷凍保存し、何時でも店を再開できる状態にしたう

えで、病魔と闘うため休業したと聞きました。再び開封することも出来ず、逝ってしまうことになり、さぞ無念だったろう。

君の人生は、余りにも短く早すぎたけれど、誇りを失わず自分に忠実に生きた人生に悔いは無かったはずだ。しかし、実に寂しく残念でならない、もっともっと、生き永らえ杯を重ね、語り合い合いたかったのに。彷徨の季節を2年余り君と共に過ごした生活は、私にとって生涯忘れられない思い出だ。いつか君と天国で再会が叶うなら、また青春時代の思い出話を肴にして、石黒、米山君達いつものメンバーと酌み交したいものだ。

酒はやっばし、あのカウンターの樽詰のスコッチをロックにして、いや昔に戻って「髭のブラックニッカ」をストレートで飲むのもいいか。今は君にありがとうの気持ちで一杯だ。どうか安らかに眠ってくれ給え。

合 掌

なお、今回この拙い稿を寄せることになりましたのは、先月逝った広石辰男君の在りし日の姿を偲ぶよすがになればと、米山、今道両君から依頼されたためです。因みに、私は信用金庫を定年退職した後、現在は週3日ほど市内の不動産会社でパート仕事をしています。

平成20年3月8日
2組 遠藤利夫

故広石辰男君 遠藤利夫君 米山勉君

米山勉君 故石黒忠正君



与那国島でダイビング

4組 米山 勉 CBD08728@nifty.com

「マンタが見たい!!」が定年後の妻の希望であった。ダイビングスクールを探し、プール講習を受けた。

初めは伊豆半島の大瀬だった。いろんな魚がいる。じっと動かないやつ、すぐに逃げるやつ、少しはなれて様子を見るやつ、集団で行動するやつ等々でなかなか面白い。

その後も伊豆半島の海岸をあちこち廻った。エアボンベ、器材、スーツ等20数キロを担いで潜るのだが、水の中では重さは感じない。水から出るときが大変である。自重とあわせて100キロ以上が足にかかってくる。海岸でヨタヨタふらふら、四つん這いになったら立てない。インストラクターの世話になった。

去年は柏島（高知県）に行った。ここでは大きな魚に囲まれた。伊豆では魚をダイバーが囲んだ。

今年はいよいよマンタが見られる与那国島である。厳寒の2月中旬、羽田から石垣島で乗り継ぎ与那国島へ渡った。日本最西端の島である。マンタやハンマーヘッドシャーク、海底遺跡等でダイバーには人気スポットである。気温15度、水温24度、風があり水から出ると寒い。だが、水中の透明度が高い。遠くまできれいに見える。大きな魚が群れている。海がめやカジキマグロもいた。だが、マンタやハンマーヘッドシャークには出会えなかった。次回に期待することにした。

近況

4組 小澤 敦男 atsuo-ozawa@hotmail.co.jp

62歳の誕生日を迎えて退職してからもう5年が経ちました。会社勤めの終わりの十余年は、福島県浜通り地方での単身赴任でした。新しく工場が進出し、そこへ研究所も建設するが当初の目的でしたが、その後の設備増設等にも関係して、気がついたら定年になっていました。

赴任当初は、定時後に近くの沢で岩魚釣りを楽しんだり、昼休みに摘んだタラの芽やワラビが帰宅時のお土産だったり長閑でした。

それでも近くのトレーニングセンターが、日韓で共催されたサッカーワールドカップ大会の参加国の合宿所に立候補したため、それに間に合うように延伸された常磐道が工場のすぐ裏を通るようになり、少しにぎやかになりました。

ちなみに合宿にはアルゼンチンチームがきましたが前評判が高かった割には予選敗退でした。

単身赴任の間に二人の子供は家を出てしまい、我が家に戻った時には、二人だけの生活が待っていました。仕事を辞めたら、しばらくのんびり暮らそうとして今日まで来ましたが、どうやらこのままずっと続きそうです。

今は、週2回孫と留守番をするために子供のところへ通うのが唯一の仕事？です。

写真は海底遺跡を潜行中の私（中央）です。



次号予告

次号は10月1日発行の予定です。編集の技術が未熟なため、作成には3ヶ月程度必要なので原稿の受付開始と締め切りは以下のようにいたします。

- 原稿受付開始 7月1日
- 原稿締め切り 9月15日
- 原稿送り先

cimamich@juno.dti.ne.jp

高知在住 40年

4組 大野 正夫 moseaweed@yahoo.co.jp

1968年、昭和43年、高知駅より40分ほどの横浪半島の先端にある高知大学の海洋生物研究の施設、臨海実験所に赴任して、ちょうど40年になります。施設の名称はいろいろと変わりましたが、仕事は海藻の繁殖や利用などの地味な仕事をしてきました。遠いところに来てしまったと当時は思いましたが、羽田より飛行機で1時間10分です。キャンパスにいる者は、定年退職とともに研究室を追われますが、幸いこのような施設はスペースがあり、定年後も4年間、部屋を替えただけで、すべての研究資材はそのまま、以前と変わらない生活を送っております。学生と研究費が付かなくなったのが寂しいですが、自宅も歩いて3分のところにあります。いつも海を眺めて過ごしております。多くの同級生とはかけ離れた生活でしたが、“どこも住めば都”と言われるように、結構満足した40年でした。

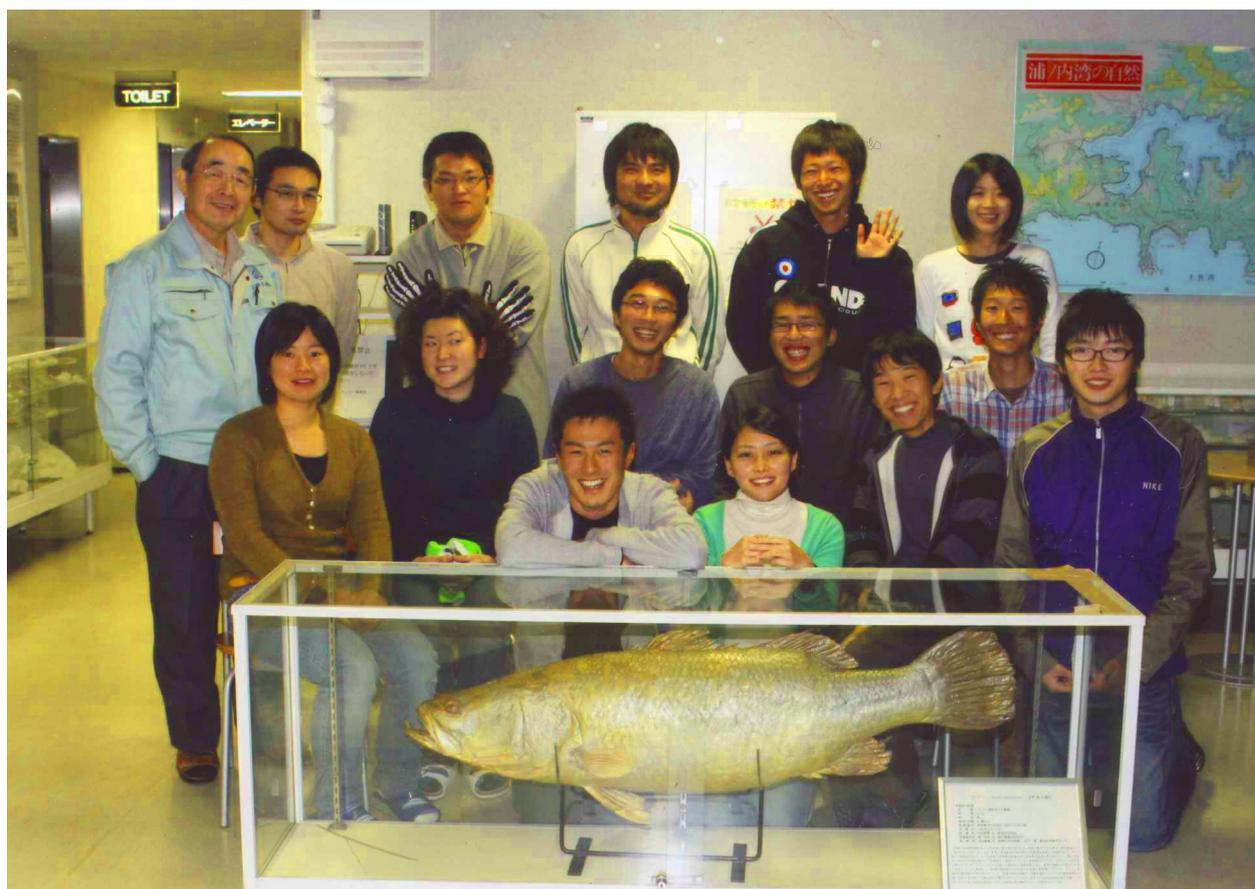
東京などの都会に出張があるとリズムが狂い非常に疲れを感じるようになりました。現在、地元企業の顧問となりその会社と高知大学との共同研究という形になって、若干のショバ代を払い、会社のスタッフも3名で研究らしきことをしております。

今、地球温暖化で海は砂漠化しており、海に海藻を増やそうという事業に国の予算がつくようになり、新しい開発分野になってきました。妙な話ですが、地球温暖化のおかげです。何事も山あり谷ありますが、時代とともに新しい産業が生まれてきてわたくしのような者が、定年後も年金生活者でなく現役でおられるのも興味深い社会現象です。

しかし、小田原の久野霊園に両親は眠っており、小八幡の浄土宗・三宝寺の檀家でもあります。息子二人は東京で職を得ており、妻の実家は東京です。元気であれば70歳くらいまでは高知で仕事をして、老後は小田原に帰りたと思っています。正月の一番の楽しみはテレビで箱根駅伝をみることです。沿道の光景をみて昔の思い出にひたります。同窓生にお会いできる日を楽しみにしております。

研究施設にて、四万十川の河口域で漁獲された最大級アカメのはく製の前

左端が筆者



親子で楽しむモータースポーツ

4組 吉田明夫 kumo@hakonet.co.jp

モータースポーツと言っても色々あり、私が興味を持ったのは自動車競争でいわゆるカーレースであります。

それは20代から始まるのであるが、当時は車両制作費や参加費用が高く一般には手の届かない趣味でした。30代半ば頃になると比較的安価に参加できるカテゴリーが設定されるようになり、日産サニー B110、トヨタ・スターレット KP-61、そしてトヨタ・トレノ AE-86 と箱形専門で乗り継ぎ、40代半ば迄に約60回出場しました。6位以内の入賞は25回、その内優勝は8回と比較的好成績でした。1レースの決勝出場台数は35台(予選を含めると60台)程度で、当時では私の年齢が最高齢でしたから、頑張ったと自負しています。レース場は、全て富士スピードウェイでした。

レースを止めた後は子供たちに目を向き、長男は小学3年生の時からポケットバイクのレースに参加したり、大井松田のカート場で大人のスクーターレースに混じって楽しんでいました。次男は小学5年生からレーシング・カートを始め、中学2年で1998年度の西関東地域チャンピオンを獲り、全日本大会でも仙台の菅生から三重の鈴鹿の間をカートを高エースに積み私の運転で転戦しました。

18歳になった高校2年で運転免許を取得した1ヶ月後の3月には富士スピードウェイのFJ-1600で優勝し、その年2001年のシリーズ・チャンピオンになりました。

以上が我が家のレース略歴ですが、昨年2007年2月10、11の2日間、マレーシアのセパン・サーキットで軽自動車と^{いじり}古のレーシングカーによる24時間耐久レースが開催されることを知り、気楽に親子で参加することにしました。



メインストレートに揃った参加車両。スタートは10日の14時で、11日の14時迄の24時間を6～8名が交代でドライブする。スタート方式はルマン式と言い、ピット側に縦列に並んだ車両に合図とともに反対側からドライバーが駆けて来て飛び乗ると言う古式なものです。



我がチーム25のダイハツ・ミラ



次男



チーム25 吉田(右端)



主催者と吉田(右)



長男(前列左から3人目)のチーム・ドリームネット

今回、長男は勤め先の会社のチーム、私と次男は別のチームで参加しました。長男チームは総合4位。

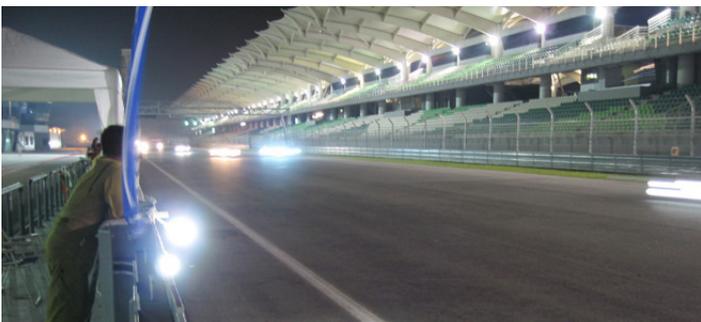


身障者もかなり早いペースで周回していました。



毎年Fiも開催されるセパンサーキット

コースは右回りの1周5.543kmです。セーフティ・ゾーンのタイヤバリアにはコブラが潜んでいるので、コースアウトは危険です。



夜間走行のコーナーは先が見えず大変です。



入賞者の皆さん

このイベントの競技車両は1月中旬にコンテナ船で一齐に日本から海上輸送します。私たち親子は、仕事の関係で日本からの往復はそれぞれ別行動でした。サーキットとホテルの間はマレーシア国産の「プロトン」で行き来し、最終日の夕方はクアラルンプールのホテル迄、富士スピードウェイの知人とドライブし、夜は好きな屋台で過ごしました。とにかく街娯の多い街で、知人は容姿端麗な美人をホテルに連れ込んだのですが、これがオカマだったので大笑いです。私はエイズの怖い健全者です。

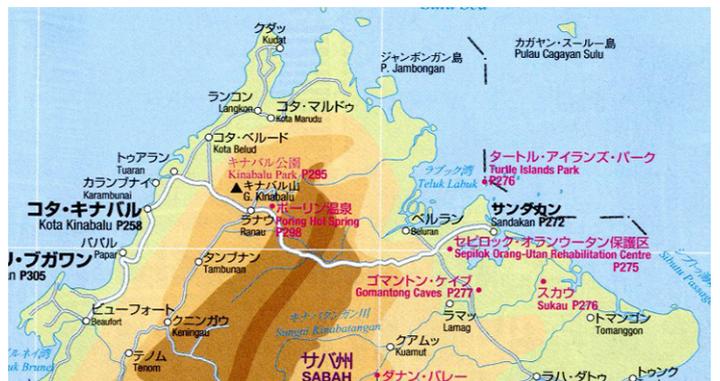


私は未知の道路を自動車で走るのも趣味の一つで、自由気儘に興味を誘われそうな場所へ立ち寄れるし、小刻みな時間を気にしなくてもよからです。

前年(2006年)は、4月に東マレーシア(ボルネオ島)へ家内と旅行し、コタ・キナバルから日本人ゆかりのサンダカン迄約600kmを、1日かけてドライブを楽しみました。



コタ・キナバルのホテルから見た夕暮れの海岸



東マレーシアの北部

コタ・キナバル市内のホテルでレンタルした車両はトヨタのAVANZASという新車でかなり乗り心地の良い車でした。市内の主要交差点は殆どロータリー式ですから方向転換は効率が良くとても楽です。

サンダカンへの道は箱根山の1号線のような感じで、通行台数は非常に少なくスピードの取り締まりも全くなく快適なドライブが楽しめます。時折熱帯地域独特のスクールが晴れ間からドゥーと来るのには驚かされました。



頂上を霧で覆われたキナバル山

途中キナバル国立公園へ立ち寄り、キナバル山をちょっとハイキングでもしようかと思ったら大間違いで、この山はきちんと登山の装備をし、最短でも1泊するつもりで登らないと駄目だと言われて止めました。それもガイド付きでないとい山出来ないとのことでした。

国道から少し入ったところに案内所があるが、この地点で海拔1500mであり、頂上は4095mであるから、実際には2595mだけを登るわけだが、遠方から眺めるその雰囲気は実に神秘的な魅力を醸し出していました。



コタ・キナバルからサンダカンへの道



キャノピー・ウォーク、前から二人目が家内。

キナバル公園を後にし、ポーリン温泉と細い吊り橋で有名なキャノピー・ウォークを楽しみました。

その後、サンダカン手前のセピロックに在るオランウータン保護区を訪れ、Rain Forestと言われるジャングルの中で珍しい鳥達の鳴き声を楽しみながら、オランウータンに会ってきました。



オチンチンも我々のものとよく似ていますね。

セピロック・オランウータン保護区からサンダカンのホテルへ行き、翌日水上集落を見学してコタ・キナバルへの帰途につきました。



サンダカンの水上集落、外観は汚いが中は結構豪華。



同年6月には韓国ソウルから^{フアンヘ}黄海沿いに^{クワンジュ}光州を経て三大名刹の一つである禅寺の総本山とも言われる^{ソンナムサ}松廣寺と近くの^{ヘインサ}仙巖寺を訪れました。以前に^{ヒンドサ}海印寺・^{トンドサ}通度寺・^{フルグクサ}仏国寺を訪れていますので、次の機会は他の古刹を訪れたいと思います。韓国の道路は日本海寄りの^{モツボ}浦項から^{カンヌン}江陵迄を除き、^{テグジュド}濟州島を含め軍事境界線迄全ての主要道路を走破しました。韓国の交差点も地方に行くとロータリー式が多いが、ソウル支庁前のロータリーは2005年に廃しされました。

韓国の交差点の良いところは、十字形交差点の直近に横断歩道が無く、曲がってから30m位の所にあるので、歩行者を常に直進の状態を確認出来ることです。日本のように赤々なんて不合理な信号はないので、どの車も黄色になると一斉に停止するし、青になるとこれも一斉にダッシュするのでストレスがたまりません。台湾は国交がないので通常は許可が下りませんが、現地の知人にBMWを借りて台北から^{キョールン}基隆、^{シンチョウ}新竹迄を走りました。

去年は3月に長年営業してきた温泉旅館を廃業し、小規模のアンテナ製作の仕事(www.lambda-ant.co.jp)をしています。

PCは今道・米山・廣瀬君達とアップルのマック愛好会を作り、アプリケーションの使い方等の情報交換を楽しんでいます。11月には突然病魔に襲われ、今年の1月末まで3ヶ月の入院をしたのですが、退院後は10kgも痩せ、目下、体力回復に専念しています。これについては次号で紹介させていただくかもわかりません。